

手紙観察日記

水前寺清人

「ようやく見つけた 見つからないとも思ったか も  
う逃がさない 人の形をした悪魔に、必ずや復讐を」

ある朝、会社の郵便受けを開けると、そう書き記された手紙が入っていた。手紙は封筒には包まれておらず、差出人はわからない。当然切手も貼付されていない。直接郵便受けに投函したのだろうか。

何とも奇妙だ。まるで小説にでも出てくるような文章が綴られた手紙が、何の変哲もない小さな保険代理店である我が社に届くなんて。小説好きである私は一瞬テンションが上がったものの、しかし今日のこれからの業務のことを思い出し、すぐに平静に戻った。

あらためて、手紙を手に取り眺めてみる。宛先も書いていない。ということは、本当に我が社に宛てたものかどうかも定かではない。誰かが屋外で手紙を書き、その手紙が封筒に入れられる前に風で飛ばされてしまい、風に乗ってたまたま我が社の郵便受けに入ってしまっただけかもしれない。

手紙を発見したのは私であるが、会社の郵便受けに入っていたので、つまりは社長に報告をする必要がある。この手紙のことを社長に報告したとして、うちの社長のことだ。必要以上に騒ぎ立て、社員全員を一行に並ばせ、

一人一人心当たりがないか詰められ、怒鳴り散らすだろう。そうなる仕事どころではなくなり、業務が滞ってしまう。

私は考えた。果たして社長に報告すべきか……。悩んだ末、決めた。

よし。見なかったことにしよう。

私は手紙をたたみ、着ていたジャケットの左ポケットにしまった。そのまま社長のもとに行き、こう伝える。

「社長。予定にはなかったのですが、今から鴨町の金鶴さんのお宅を訪問してきてもよろしいでしょうか。どうやら他社が金鶴さんに営業かけてるみたいで、金鶴さんが他社にとられる前に、唾つけときたいんですね。よろしいでしょうか」

「む？ 金鶴さんは太客だからな。わかった、ぜひ行ってきてくれ」

私は社長の許可を得て、会社を飛び出し社用車を走らせた。車を走らせ十分後、適当なマンションの前に車を付け、マンションに入り、適当な郵便受けに例の手紙を放り込んだ。

そのまま私はパチンコ屋へと向かった……。

くくく

私は新米社会人。マンションの一室の美容クリニック

で、看護師として勤務している。ドジで仕事はできないけれど、働いて自分でお金を稼ぐということ、大好きな美容業界に携われていること、などやりがいをもって日々過ごしている。

お昼休憩が終わり、そのまま仕事を始めると眠くなってしまうので、ストレッチがてらクリニックの外に出た。だが用もなく外に出るのもなと思い、クリニックの郵便受けをなんとなしに覗いてみる。するとそこには手紙が入っていた。

手紙には差出人名がなく、そしてとてもおぞましいことが書いてあった。院長から「報連相を忘れないでねえ」と常々言われている私は、すぐさま院長のもとに行き、手紙を見せた。

すぐにほかのスタッフも、手紙のもとに集まってくる。

「何？こわい。警察に届けましょうよ」

とはフロント係の加藤さん。

「だけど、もしこれがいいたずらでなく、本当にうちに宛てた手紙であるなら、大変じゃない？まずは差出人を探したほうがいいんじゃないの」

とは先輩看護師の科藤さん。

「たしかにそうだけど、ここはやはり警察に連絡したほうがいいよねえ。もしかしたら、しばらくうちのクリニックの周りの警備を手厚くしてくれるかもしれないしねえ」

との院長の一言。美容施術の成果か、ふだんは皴一つない院長のお顔であるが、この時ばかりは眉間に皴がよっていた。

院長の言葉を受け、私はさっそく警察に連絡し、すぐに警察官が来た。

「面堂署の巡査、樽井と申します。怪しい手紙が来たということで」

私たちは手紙を見せ、経緯を話した。

「わかりました、ではしばらくおたくのクリニックの周りを私服警官に警備させます。怪しい人物を見つけたらすぐに捕獲させます。ですので、あなたたちはこの手紙のことは忘れて、今まで通り過ごしてください。どうか安心ください。一応手紙は我々で預かりますね」

樽井巡査がそういうので、私たちは一安心して、手紙を渡した。よかった、仮に手紙の差出人が表れても、警察がなんとかしてくれる。本当によかった……。

私たちは警察署へ帰っていく樽井巡査を、満面の笑みで見送った。

樽井巡査が私たちのクリニックを後にして警察署へ帰る道中、適当なアパートの適当な郵便受けに手紙を放り込み、この件をなかったことにしていたのは、この時はまだ知る由もなかった。

くくく

俺は自他ともに認めるくず人間。数々の人を傷つけ、そのたびに逃げて逃げて逃げ回り、今に至る。犯罪こそしていないものの、気分は指名手配犯そのもので、二度と地元には帰れない。そんな流浪の民、俺。

ある日。仕事から帰宅すると、アパートの自室の郵便受けに手紙が入っていた。差出人名はない。しかし、手紙にはとても恐ろしいことが書かれていた。

読んだ瞬間、背筋が凍った。なぜか。誰がこの手紙を出したのかはわからないが、心当たりがありすぎるのだ。心当たりで真つ先に思いつくのは、高校一年生の時に付き合っていたカヨコ。かなり乱暴に扱ってしまった。カヨコは俺が初めての彼氏だったようで、そんな俺に嫌われたくないからか、反撃することはなく、俺の言いなりであった。そんなカヨコが初めて意見を主張してきたのは、カヨコの妊娠が発覚した時だった。カヨコは子どもを産みたい、でも高校はやめなきゃだし、ならば一緒に高校を退学して、二人で働こう、幸せな家庭を築こう、と俺に嘆願した。俺はカヨコを一発殴り、考えた。子どもを産むにしても金がかかる。中絶費用を向こうの親から請求されるのが目に見えていたので、倒れたカヨコの身を起こし、「わかった。俺も高校やめて働くから、一緒にお腹の子を育てよう」と言った。カヨコは泣いて喜んだ。

その日から俺は転入先の高校を探し、携帯電話の番号変更の手続きなどを進め、カヨコの出産当日には、とつくと遠く離れた地域の高校で新生活を始めていた。カヨコに妊娠を告げられた日が、カヨコと最後に言葉を交わした日である。もちろん今に至るまで、カヨコとは連絡を取っていない。

心当たり二人目はアキヒコ。かつて勤めていた会社の同僚である。高校卒業後、土木会社に就職した俺は、日中は土方仕事をして、夜は遊び歩く、そんな生活をしてきた。いつものように仕事終わり、アキヒコを誘って夜の街に繰り出した。二人の女性をナンパし、計四人で居酒屋を二軒はしごした後、べろんべろんの状態でカラオケに入った。酔った勢いで、俺とアキヒコは名も知らぬ女性二人にまあまあ酷いことをした。女性らは酩酊状態だったのもあり、すぐに抵抗はしなかったものの、朝方、片方の女性が我にかえり、彼氏を呼ぶと言い出し、ほどなくして現れた彼氏はどう見てもカタギではなく、しかも自分を二人連れてきた。

俺とアキヒコはカラオケボックスの中でさんざん怖い脅しを受けた。どう考えてもカタギではない形相で、彼氏は言う。「俺の女に酷いことをしたのはどっちだ？俺が用があるのは、そいっただけだ。もう一人の女は知らん、勝手にやってる。さあどっちだ」

俺はアキヒコを指さし、食い気味に「こいつです」と

だけ言つて、アキヒコが女性に対してしたことをでつちあげた。彼氏は聞くやいなや、怒り狂い、次の瞬間にはアキヒコの顔は潰れていた。

「ここからもつと痛い目にあわせるからよ、身体のお大半は潰れると思えよ？」

アキヒコへの天誅が下されるのを横目に、俺はカラオケボックスを後にした。携帯電話を着拒にし、そのまま夜逃げした。

以上の二人以外にも、心当たりがありすぎる。……ここまでか。

誰が手紙を送ったのかは分からないが、殺されても文句は言えない。それならいっそ、自分の手で終わらせよう。

俺はバイクを走らせ、家から十キロメートル離れた峠へ向かう。一番標高の高い位置にバイクを止め、俺は手紙を握りしめ、ふもとへ向かつてダイブした。

落下途中、手紙が手から離れ、宙を舞いどこかへ行つてしまったが、それに気づいたのは地面へ激突する直前であった。

〃〃〃

ここは峠にポツンとたたずむ、昔ながらの喫茶店。老夫婦が経営し、私はアルバイトとして働いている。世界

三十か国を旅し、十か国語を習得したものの、特にやりたいことのなかった私は、地元この店でかれこれ五年、お世話になっている。スタッフは老夫婦と私の三人のみ。場所柄、お客さんはほとんど来ない。私はフルタイムで出勤しているものの、お客さんは一日一人いるかないか、である。どう考えても赤字でしかないのに、なぜフルタイム勤務をさせてもらっているのか、本当に理解できない。夫婦ともども認知症がはじまっているのだろうか。まあこちらとしてはありがたいのだけど。

ある風の日、そろそろ閉店という時間、店先に一通の手紙がおかれていた。「復讐」という文言が使われた奇妙な手紙である。

老夫婦の主人は言う。

「なんじゃあこの手紙は。こんなポツンと一軒喫茶に、こんな内容の手紙をよこすとは。間違いかのお」

老夫婦の奥さんが続く。

「間違いでこんな場所に置いていかないでしょう。きつといたずらよ」

その通りだ。この老夫婦がこの店を開いてすでに五十年が経つらしく、こんな優しい夫婦が誰かの恨みを買うとも思えない。いたずらか、間違いに決まっている。

手紙はいたずらオア間違いが確定しているの、老夫婦が店の奥の箆笥の中に保管し、そのまましばらく様子を見ることになった。

二日後。私はあの手紙のことが気になりはじめ、仕事でもそればかり考えてしまっていた。しかし、老夫婦に見せろと言っても、逆に怪しまれてしまう。

私は、夜中に店へ侵入することを考えた。そしてこっそり筆箱を開け、手紙を見てみよう。なぜだかそうせずにはいられなかった。あの老夫婦は田舎のお年寄りの典型、セキュリティ意識皆無な二人だ。きっと店のカギも閉めていないだろう。

私は早速、その日の夜中に店へと向かった。

店に着き、愕然とする。なんと、店の明かりがついているではないか。しかし、入り口には「close」のプレートが掲げられており、営業時間外であることは明白だ。そして、中から何やら声が聞こえる。私は店の壁に耳を当て、そっと耳を澄ます。中からは英語が聞こえてきた。

「……そうそう、歩行者を車で轢いちゃって、示談にするために一千万円必要なのよ。お袋、申し訳ないけど、今から言う口座にお金、振り込んでもらっていい？」

実際に聞こえたのは英語であったが、十か国語に堪能な私は、すぐに英語の内容を理解することができた。聞こえてきたのは、オレオレ詐欺のテンプレートと呼ぶにふさわしい内容である。

さらに耳を澄ますと、別の人間の声が聞こえてきた。こちらはフランス語のようだ。

「……それでね、お宅の口座に不正アクセスの経歴が確認されました。お金を引き抜かれる前に、私たち警察がいったん口座に入っているお金を避難させますので、今から伝える口座に、あなたの口座に入ったお金を全額、振り込んでいただけますでしょうか」

フランス語だろうと瞬時に理解できる私は、理解した。この店もしや、特殊詐欺グループの拠点なのではないか？

私は怒りが込み上げてきた。というのも、私がこの店で働く前、世界三十か国を旅していたのは、特殊詐欺グループの拠点を探すためであったからだ。何を隠そう、私の母は特殊詐欺に引っかけ、貯金をすべて失い、その絶望から自ら命を絶った経緯がある。私は母の無念を晴らすべく犯人のグループを世界中旅して探し回ったが、未だに見つかっていない。

この店の詐欺グループが、私の母を騙した奴らと同じグループかはわからない。だが、現にいま、母のような被害者が一人、また一人と増えているのだ。……許せない。すぐに警察へ連絡しなければ。

警察へ連絡しようとした次の瞬間、店の中から、老夫婦の高笑いが聞こえてきた。……まさか、老夫婦も詐欺グループの一員なのか？

まもなく老夫婦の喋り声も聞こえてくる。

「いやあ、詐欺とはいいいいものだ。簡単に金が入るの

だからな。うちのスタッフにも勧めたいものだな」

「駄目よあなた。あの子はお母さんが詐欺のせいで亡くなっているの。てかその詐欺も、うちらが仕掛けたものなんだけどね。ほんと、引つかかる人つて、ばかよねえ」

……そんなまさか。そうだったのか。本当に、本当に許せない。警察への連絡はやめた。私が、この手でこいつらを裁かなければ。

私は、近くにあった木の枝を拾った。なるべく、先のとがった、鋭利な枝である。人間の目を一突きにできるような、木の枝だ。

先のとがった木の枝と、怒りに湧いた感情を携え、私は店のドアノブに手をかける。今こそ、母に代わって復讐をする時だ。

……怒りに身を任せ、ドアを勢い良く開け、店の中へと歩を進めた。

「ようやく見つけた 見つからないとでも思ったか も  
う逃がさない 人の形をした悪魔に、必ずや復讐を」